

特219

902

防局長
博士

高野六郎

結核
豫防

國民讀本

財團法人結核豫防會



始



特219
902

結核豫防 國民讀本

目次



皇后陛下御愛慮
一、結核とはどういふ病氣か……………一

二、結核はなぜ日本に蔓延して居るか……………一

三、結核豫防が出来る……………一

四、結核は罹りやすく治り易い……………三

五、結核豫防と日常生活……………三

六、結核患者のある家庭では……………三

七、結核患者のある家庭では……………三



- 八、結核の多い社會では……………三
- 九、財團法人結核豫防會の使命……………六
- 十、結核の無い國を目指して……………六



結核豫防 國民讀本

一 皇后陛下御憂慮

昭和十四年四月二十八日長くも 皇后陛下に於せられては總理大臣を御前に召されて次の御令旨を賜はつた。

令旨

國民體力ノ向上ハ國本ニ培フ所以ニシテ現下特ニ心ヲ致スヘキ所ナリ而シテ近時結核ノ蔓延甚シク其ノ國力ニ及ホス影響ノ大イナルニ鑒ミ誠ニ憂慮ニ堪ヘサルナリ茲ニ内帑ヲ頒テ之レカ豫防並ニ治療ニ關スル施設ノ

一 助タラシメムトス官民克ク力ヲ戮セ之レカ目的ノ達成ニ努メムコトヲ望ム

右の如き思多くも有難き御旨と共に多額の御下賜金を拜受した總理大臣は恐懼して結核豫防事業強化に邁進することに決意し、中央地方の結核豫防施設を擴充するばかりでなく、新に官民力を戮せて財團法人結核豫防會を組織し、よつて以て本邦の結核豫防に一新時期を劃さうと覺悟の程を示されたのである。

申すまでもなく結核と云ふ病氣は國民保健上極めて重大な惡疾であつて、之が蔓延して居ると國民の體力を低下せしめ、國力を弱化せしむる虞が甚しく大である。結核は所謂國民病の首位に置かれるものであつて、此の國民病を排除しなければ國力の發展を期し難いのである。其の結核が現在大に蔓延して未だ消褪の徴を示さず、遂に

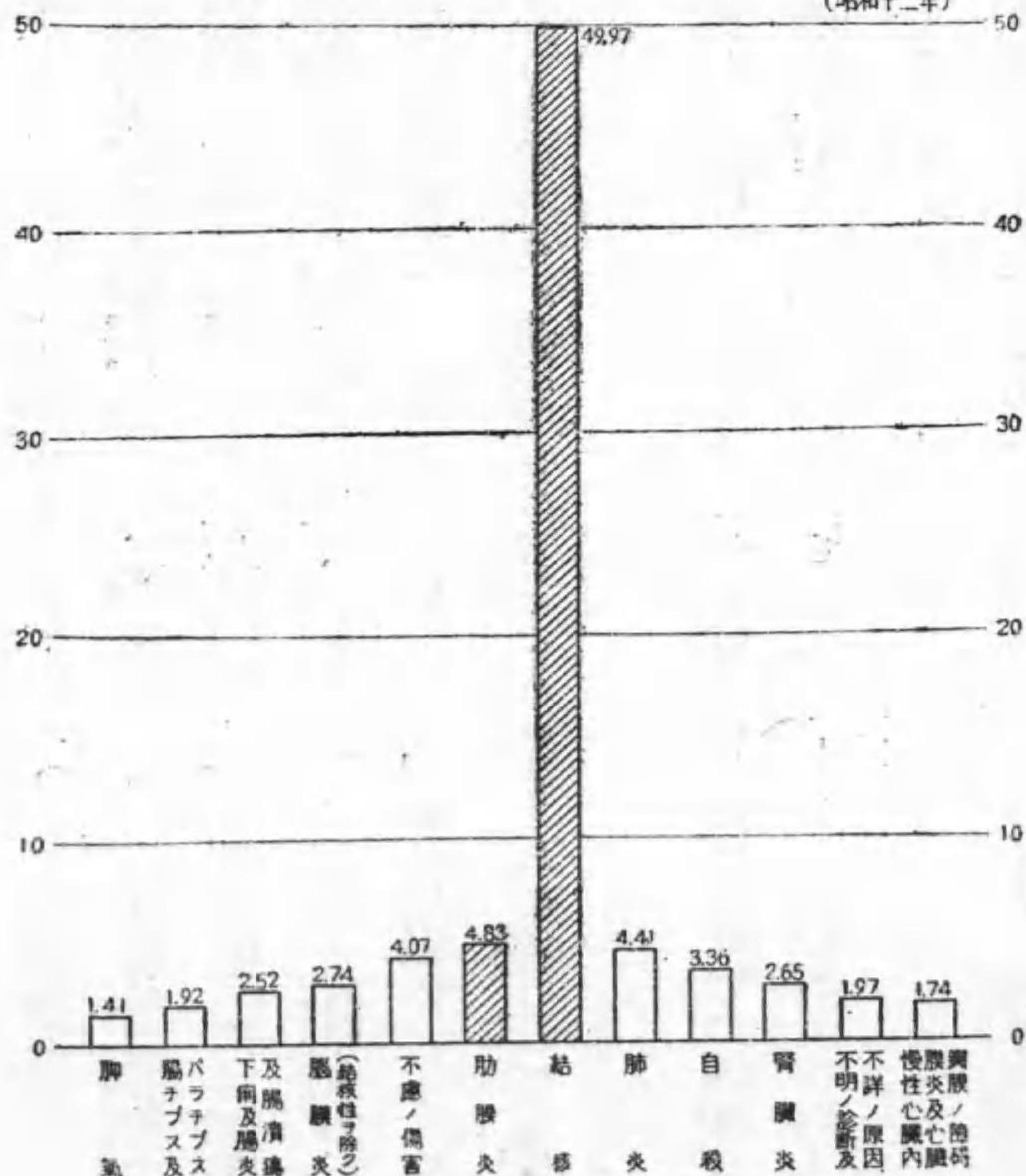
御旨を拜するに至つたのは、國民の正に恐懼に堪へざる所である。

日本に於ける結核蔓延の状況を見ると、文明國としてあるまじき有様である。死亡統計によると近頃の我國では毎年十五萬人位結核で死ぬのであつて、結核に患つて居るものはその十倍の百五十萬人以上に及ぶと推算されて居る。大體人が五十人も集れば其の中の一人は結核患者といふ勘定になり、二十歳頃の人達では二十人に一人位の結核患者がありさうである。壯丁検査の實績でも略ぼこれに近い數字が擧げられるやうである。

結核に最も多く冒されるのは日本では廿歳前後の男女であつて、結核が蔓延してるために日本の青年男女の死亡は倍加されて居るのである。働き盛りの人、或は之から大に働かうとする人達がかくも多く結核に悩み、結核で倒れるといふことは、如何なる點から觀ても非常の損失である。個人の不幸、家庭の損害、國力の消耗、誠に憂慮

青年自十五歳至二十九歳ノ主ナル死亡原因

(昭和十二年)

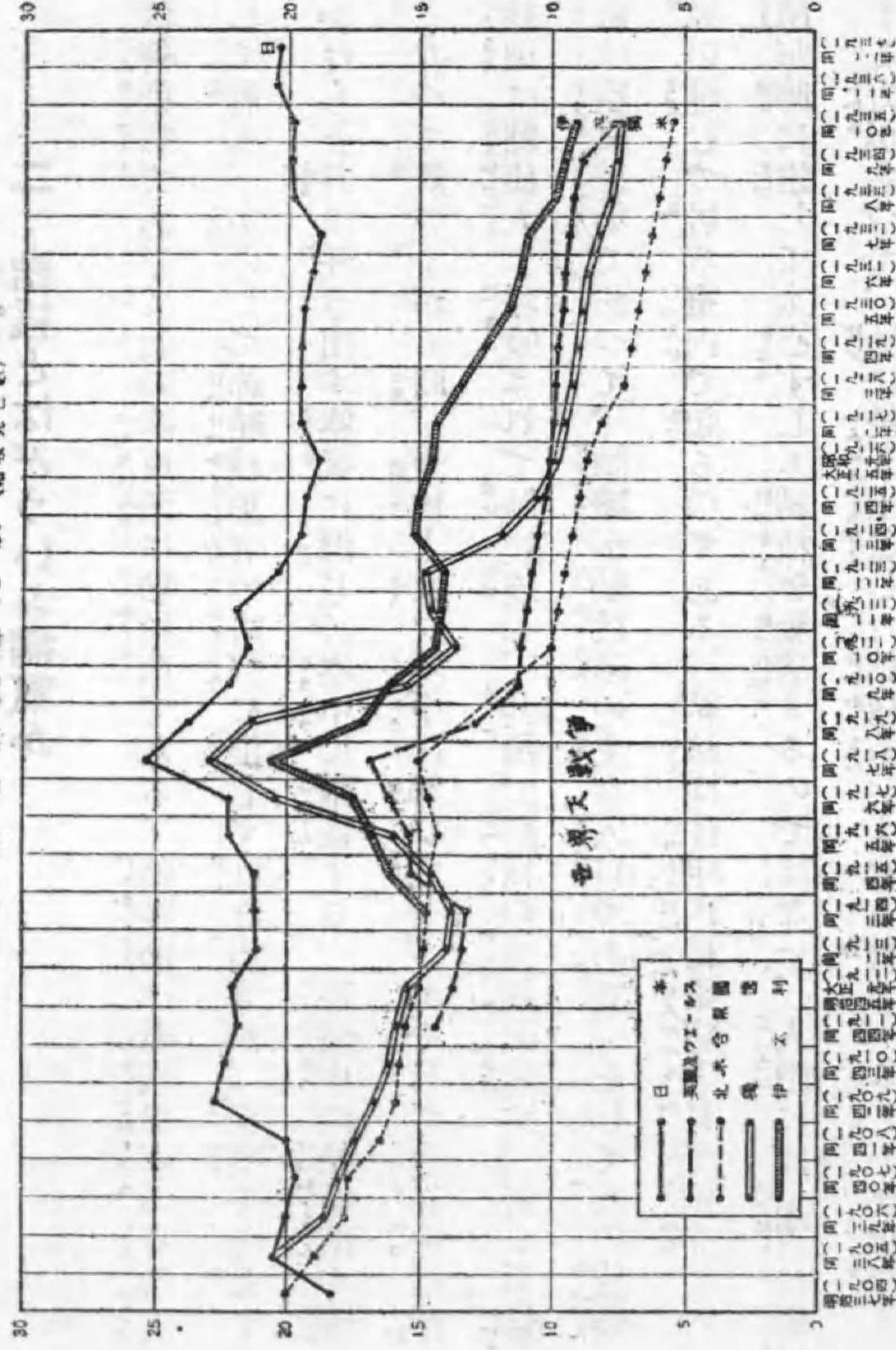


の極みである。

結核は單り日本だけの問題ではない。嘗ては歐米諸國の問題でもあつたし、現在では殆ど世界到る所の問題である。只英米獨伊佛其他優秀な文化國では結核は既に著しく減退して、日本の現状の二分の一乃至四分一程度に少くなつてしまつたが、五十年前には日本の現状よりも遙に多い結核蔓延度を示したのである。然し彼等はいち早く結核の慘禍を見て取り、萬難を排して其の豫防に努力した結果、結核は豫防の出来る病氣であることを實證したのである。結核は豫防せねばならぬ病氣である、而して豫防の出来る病氣である、即ち日本も最早結核豫防に躊躇すべき時ではない。日本人にも結核豫防が出来るに相違ないのである。

結核豫防に成功して居る國は概ね國力の充實して居る國である。國運隆々たる國で結核の蔓延にまかせておくやうな國は一も無い。全く「結核無い國強い國」である。従つ

主要國結核死亡比較 (A.D. 1925-1930)



て結核蔓延國は將來の弱國たるべき虞がないとは云へぬ。

今や 皇后陛下の御令旨を奉體して結核豫防に國民の總力を動員すべき時が來た。

國家の前途のためにはいつかは完遂せねばならぬ事業が竟に斷行さるべき時に達したのである。

二 結核とはどういふ病氣か

結核は傳染病であつて其の病原菌は結核菌である。結核菌は結核患者の身體内に棲息蕃殖して居り、主として肺結核患者の咯痰に混じて吐き出され、又咳や嚏をする時に痰のかけらと共に呼き出す空氣に混じて空中に飛散する。咯痰中の結核菌も痰が乾いて埃となつて舞ひ上がる時、飛埃と共に空中に舞ひ立つ。かくして空氣中に浮んで居る結核菌は健康人に呼吸されて肺に達し、其所で結核の感染を起す。だから結核感染の大部は空氣感染であつて、肺臓が結核菌の主な入口である。そして此の感染は不潔の空氣の淀むで居る室内で起るのである。結核は住宅内傳染病と見て差支ない。

結核菌が肺に達しても必ずしも結核を發病するのではない。人體には幸に結核菌に抵抗する力があつて、肺に侵入土着した結核菌をも取り押さへることが出来る。そ

れで何事もなくすむでしまふことが寧ろ普通である。

然し人體の抵抗力が弱いか、結核菌が強いか、或は入つて行つた結核菌が餘り多過ぎて取り押へ切れなくなると、結核菌の方が人體の體力を押へて、徐ろに其の眷族を増し、段々肺組織を壊し、病變を起すことになる。病變が發生すればそれは病人である。つまり結核菌と人體とが押しつ押しされる間に、決定的に體力が勝つて治るか、逆に結核菌が優勢で病人となるか、時には勝敗が繰り返へされて、病人になつたり、治つたり、再發したり、増悪したり、衰弱して死んだり、千狀萬態の變化を來するのである。何分この一進一退が長くかゝるので、結核は慢性傳染病と稱せられる。

結核菌は最初は肺の一局部に座り込むで居るが、段々病勢が盛んとなると、肺の中を侵略して行くだけでなく、全身どこへでも殖民することが出来る。全身到る所、結核菌の犯し得ない所はない位である。

結核病は結核菌と人體との持久戦であるから、結核菌が後からく、澤山押し込むで来るやうな場合には人體が敗ける。又生活條件が不衛生的で、人體の抵抗力が低下するやうな場合にも人體が敗ける。其と反對に、侵入した結核菌は少數微力であり、身體抵抗力が強大であれば結核菌も齒が立たないで、身體の一隅へ押しつけられ、死滅するか、或は手も足も出ないやうに取籠められてしまふ。然し一旦押さへられた結核菌が尙餘喘を保つてゐる間に、萬一人體が何かの原因で弱つて、その抵抗力が低下するやうな機會があると、結核菌は猛然として盛り返へして来ることもある。かくの如くにして發病することもあり、再發することもある。

人間の身體は又年齢によつても結核菌に對する抵抗力が動搖する。第一には乳幼児の時代には結核菌に對する抵抗力が弱く、幼い小兒に結核菌が入ると殆ど急性傳染病の如く烈しく經過することが屢々ある。次には身體發育極期に再び著しく抵抗力が

低下する。故に結核豫防施設の發達して居ない日本に於ては、二十歳前後の結核患者が最も多いのである。假に感染は少年期に行はれても、發病は青年期になる場合もあるのであるから、大體から見て、小兒、少年、青年各期を通じて結核豫防を怠ることには出來ない。

結核菌が無ければ結核病は勿論無いことになるが、結核菌があつても必ずしも結核病は起らない。即ち結核菌に對する抵抗力を引き下げる誘因が無ければ發病しない。此の誘因は生活條件に基くことが多いので、結核を社會的疾患とも稱するのである。

三 結核はなぜ日本に蔓延して居るか

結核菌は明治維新前の我國にも居たのであるが、昔は結核などは呼ばず、勞咳と

一三
か癩癰とか稱して、血統病に屬するものと誤信して居た。然し江戸時代の癆咳も現代の結核も同一物である。

昔は結核が蔓延しなかつただけである。蔓延に適する社會環境がなかつたから蔓延し得なかつた。然るに明治以後の所謂近代様式生活は結核菌に蔓延の好機を興ふるに至つた。それは西洋でもさうであつたし、日本でも同様である。

どうして近代生活は結核を蔓延させるか。それは結核病の本質を考へればよく理解することが出来る。

前に述べた通り、結核は室内感染病である。昔は結核患者が他の多くの人達と室内で暮すやうなことは極めて稀であつた。現今では、學校でも、寄宿舎でも、役所でも、デパートでも、電車汽車バスなどでも、殆ど毎日々々結核患者と同室して、多少の結核菌を含むだ空氣を呼吸するやうになつて居る。多人數の家屋内密集生活が盛に

なればなるほど結核菌感染の機會が多くなるのであつて、近代生活は其のためには誠に好都合に出來て居る。

又結核は社會病である。人體を弱め、結核菌に對する天賦の抵抗力を引下げるやうな生活環境が存在すれば、結核菌に征服されて發病するのである。この生活條件が我々の文明生活に於て、殊に未完成の文明生活に於ては、概して不完全であつて、例へば住宅の不完全とか、食物の缺陷とか、勞働の過激とか、身體を弱め、抵抗力引下げに役立つ場合が多いのである。一例を挙げれば、結核に感じ易い妙齡の女子が、纖維工場などに雇はれ、不良なる衣食住と、過度なる勤勞と、結核患者との混在等が混雜して多數の結核患者を發生し、發病後歸郷したる結核女工は不衛生的な家屋内で不注意な療養をする間に夥しい家庭感染を起したと云ふ時代があつた。

日本の結核は、文化の發達と平行して、明治十年代よりも二十年代、二十年代より

も三十年代、三十年代よりも四十年代と云ふ風に蔓延の度を増し、大正七年を極點として其後は幾分降り氣味であつた。爪先下りに、昭和七年まで來たが、それ以後は逆轉の徴を顯はし、最近は大正十二年頃の結核死亡率を示して居る。明治の末から大正始めの結核死亡率を再現しやしないかと怖れられるのである。

尤も大局から見れば日本の結核は未だ確實に減退の徴を示さなかつたと見ても先づ差支ないのであつて、日露戦争頃から、人口一萬對結核死亡率二〇を多少上下しつつ、今に及びて居ると見るべきである。即ち結核蔓延の著しきに驚き、之が豫防に着眼してから既に三十年に達するが、未だ確然たる豫防成績を示すに至つて居ないと云ふ現狀である。

日本の結核は甚しい蔓延の度を持続して三十年も経たのであるがその間日本は結核に向つて全く無爲に過したと云ふのではなく、又日本の結核が無限に蔓延しつゝあ

るでもない。此の三十年間に我國の結核豫防の準備は着々進められ來つたのである。又日本の結核はもう是以上は蔓延しないであらうと云ふ見透しも略ぼついたのである。日本國民の結核抵抗力も大體此の位と云ふことは過去三十年間に證明されたのであるから、今から國民が結核豫防に十分努力するに於ては、恐らく歐米各國の過去三十年間に示した成績に劣らざる結果に達するであらうと思はれるのである。

たゞ日本の結核豫防は歐米に比して三十年餘り後れて居るのであるから、我々は此の後れてる部分をいつか取り返へさねばならぬ。所謂追ひつけ、追ひ越せである。我國は結核の危害を蒙つた年月も歐米よりは遙に短いけれども、さればとて此の種の問題に勝手な理由をつけて呑氣に構へて居るわけには行かない。例へば現に北米合衆國の最近の結核死亡率は人口一萬につき五であるのに日本は二〇である。過去などはどうであらうとも、我々は速に之に追ひつき、追ひ抜かねばならぬ。

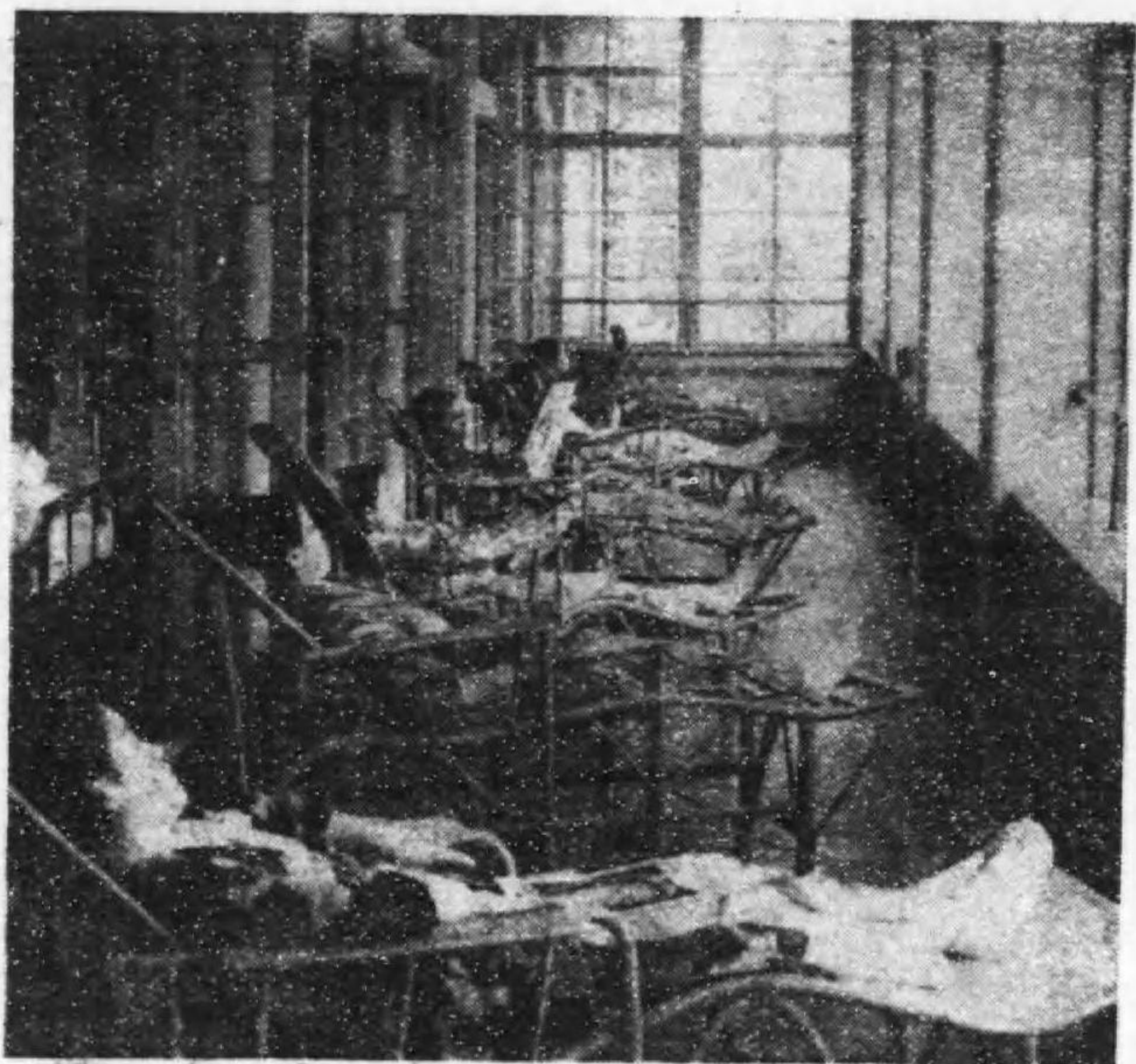
四 結核は豫防が出来る

歐米では十九世紀は結核の蔓延極期であつた。歐米に於ても矢張り近代的生活が發展して結核が蔓がつたのである。十九世紀の末に結核は傳染病であることが分り、又結核には特殊の療法は發明されずとも、人體天賦の抵抗力によつて、發病の防止も、結核病の治癒も行はれることが分り、又此の結核抵抗力は體力を強めることによつて強めることも出来ることが分つたため、以上の知識の上に結核豫防方策が組立てられ、そして着々効果を擧げて居るのである。

歐米で結核豫防に成功した國の様子を見ると、先づ結核療養所を必要だけ持つて居る。其の數はせめて一年間に死ぬ結核患者の數だけの結核病床を備へることが標準とせられて居る。若し日本で今すぐ其通りにするとすれば十五萬床を要するといふこと

とになる。

療養所に入所すれば其の患者の體内の結核菌は社會から隔離されるのであるから、それだけ、世の中の結核感染危険が減することになる。又療養所では醫療の最善を盡して治療するから、最も速に治癒が進行する筈である。自然療法であつても、外科手術によつてあつても、榮養療法であつても、その他何であつても、早く治ればそれだけ世の中の結核菌生産所が減るのであるから、其所にも豫防の意義がある。又結核療養所に於ては療養生活をよく訓練することも出来る。全治せずして退所するとしても、其後の療養が正しく行はれ、病毒を散布する如きことは少いであらう。



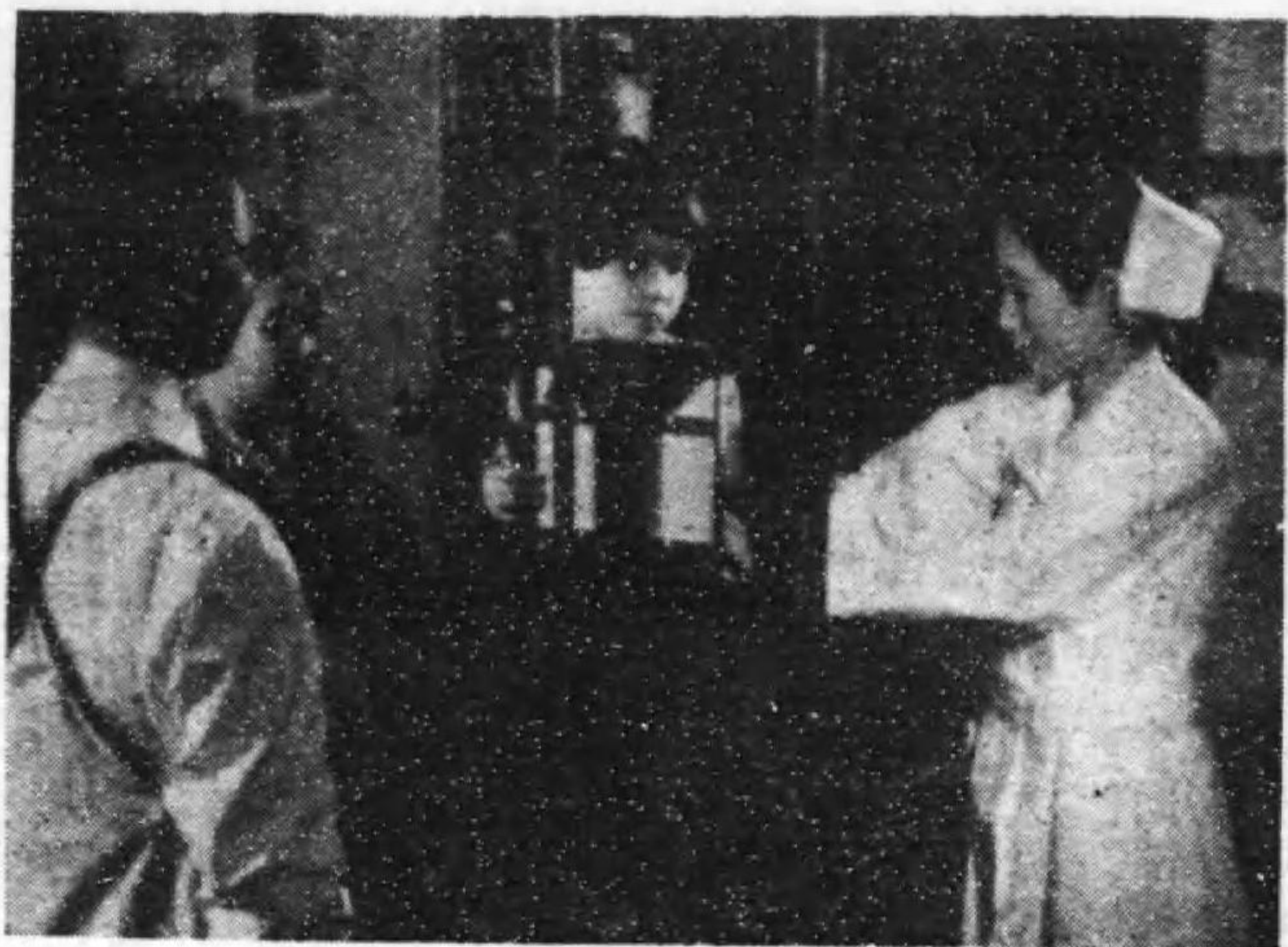
寫眞は東京市療養所に於ける患者静臥の状況を示す。入院患者の中重症者は床上に於て絶對安靜を遵守するが、輕症患者は定められた時間にペランダに出て静臥臺の上で大氣浴を行ふ。

療養所と並らひで重要視せられる結核豫防施設は相談所である。我々は健康相談所とも、結核豫防相談所とも、或は保健所とも呼ぶ。相談を受けて指導する所である。家庭療養の結核患者の居る家庭、嘗て結核患者のあつた家庭、結核に關聯した虛弱者のある家庭等に就て、感染防止、發病防止、その他結核豫防に關し萬端くまなく世話をしてやる役目を持つのが此の相談所である。相談所は外來者を迎へて診斷指示をなす施設もあるし、家庭を訪問して指導する手も揃つて居る。かくの如き相談所が人口十萬乃至五萬の地區に一ヶ所づゝ設置されたいと云ふのが標準である。我國にも千ヶ所位の相談所が出来たら大に豫防成績を擧げるであらうと思ふ。

相談事業の成績の擧がるのは、一般家庭の日常生活が改善され、結核豫防の立場から見て缺陷が無くなるからである。一般生活が結核豫防的に向上されると云ふことは、單に相談所のための盡力に委すべきものでなく、民衆の結核豫防知識啓發に、且又

二〇
結核豫防思想の向上にも格別の力を致さねばならぬ。社會全般が結核のことをよく知り、結核豫防に興味を持ち、その豫防の實行に熱心であるやうになれば結核豫防は始めて成績が擧がる。

結核豫防は畢竟生活の改善が根本であつて、各人の日常生活を結核豫防に叶はせんがために、個人々々も努力し、公共施設をも整へるのである。療養所は個人の家庭に置かぬ方がよい患者を收容するためのものであり、相談所は個人の家庭の生活を指導して豫防上療養上に不都合がないやうにすることが役目なのである。要するに國民の一人一人が結核を豫防すればそれで國民の結核豫防は完成するのであるから事柄は簡単である。そして結核豫防は各國に於て既に成功しつゝある既成事實なのだから我國に於ても其の可能を確信して大に奮勵せねばならぬのである。



健康相談所や保健所では結核豫防の専門醫師及び看護婦が居り、結核の診断に必要な各種の設備を有し別記の如き結核豫防の第一線の事業を行ふ。寫眞は東京市内某相談所内に於て同所を訪れた子供につきレントゲンの検査を行はんとして居るところを示す。

五 結核は罹りにくく、治り易い

結核は不治の病の如く信ぜられ、結核の診断をつけられるのを恰も死刑の宣告でも受けたやうに悲観するのが常である。之も一應尤であつて、世に所謂肺病にかゝつた者は概して豫後が悪い。そして其の悲惨な成行は到る所で毎日目撃されるのである。資力のある家庭でもどうにもならぬ場合が多い。資力の乏しい人達は結核を死病と見るのも無理はないと思ふ。

然しそれは事實の半面であつて、世の中には餘り多數の結核患者があり、且つ重症末期の患者のみが結核として人目に曝されるので、如何にも結核は悉く不治の難症と目に映るのであるが、半面性質の良い結核、軽くてずん／＼治つて行く結核も非常に澤山あるのである。良い方は結核として數へず、悪い方だけを結核として墮るの

だから、結核が事實以上に怖ろしく見えるのは當然である。

そこで、結核を無暗に怖れるのも愚であるし、又結核を輕んじて其の豫防に必要な警戒をせぬといふのも馬鹿な話である。結核に對する正しい認識が先以て必要である。

人體に結核菌が侵入し、人體と鬭争を開始すると、其の結果として人體にはツベルクリン反應が現はれるやうになる。だからツベルクリン反應を檢べると嘗て結核菌と争つたことがあるか否かゞ分るのである。この反應の檢べ方は極めて簡單であつて、ツベルクリンの薄い溶液を皮膚内に注射して置いて、其の場所が赤く腫れれば陽性反應である。大體陽性反應は結核征服者か現在結核患者かを示し、陰性は未だ結核の經驗の無いことを意味する。反應が陽性だから善いとか陰性だから心配だとか云ふのではない。今日陰性でも明日は陽性になるかも知れないし、陽性であつても、其が對結

核戦勝記念碑であれば大に好ましいが、目下敗走中の信號であつては憂慮に堪へないことになる。

このツベルクリン反應を調べて見ると、都會生活者などでは生後年を経るに従つて急速に其の陽性率を高め、小學校を終る頃は過半数が陽性となり、壯丁に達する頃は大部分が陽性となる實狀である。即ち都會に住めばかくの如くに結核感染は烈しく行はれて居るのである。然し結核菌に侵された者が全部結核を發病するのでは決して無く、青年に就いて調べて見ても先づ五パーセント位の結核患者を發見するに過ぎない。人體には幸にして結核菌に對する天賦の抵抗力があつて、其の抵抗力の弱つた者だけが結核菌に敗けて病人となるのである。患者となる方が寧ろ例外なのである。家庭内に結核患者があれば家族に結核患者を發生し易いのは事實であるが、然し場合によつては一人も患者を出さないやうなものも決して稀ではない。否、十分に注意が

行き届けば結核患者と同じ屋根の下に居ても發病しなすむのが當然である。

元來ツベルクリン反應陽性者は、極めて輕いにしても、結核患者で現にあるか、或は嘗てあつたかと見て差支ない。然し其の大部分は治つてしまふのである。更に進むで初期患者と見るべきものでも、治つてしまふものが澤山ある。現代の都會の青年は大方輕症結核の體験者であるとも云へやう。更に進むで可なりの病狀を呈した者でも、全治した實例はいくらでもある。其の實數を比較したなら、結核患者は悪くなつて行く者よりも治つて行く者の方が遙に多いのである。

結核が非常に蔓延して居る時代でも、結核で死ぬ數は全死亡の十分一位のものであつた。一生の間に結核に罹らぬものはないと云ふ時にも十分の九は結核で死ぬことを免れたのである。かく考へて見ると、案外結核は治る方が多いものである。

發病の防止も、病症の輕快も、其の根底は人體に備はる抵抗力であつて、其の抵

抵抗力を増す工夫もあるのだから、我々は結核に對して徒らな恐怖を抱くに及ばぬ。殊に感染の當初に於て、又發病の初期に於て、體力の未だ衰へざるうちに、體力の根本を培ひ、抵抗力の増強に努めれば、多くの場合、發病し難く、治癒し易いといふ成績を見る筈である。

六 結核豫防と日常生活

結核は罹つてから治すよりも、罹らぬ前に豫防するを主眼とせねばならぬ。

結核豫防の根底は日常生活の改善である。衣住食勤の四に眞剣な注意を拂へば結核は大體豫防が出来る。

衣の注意

衣類が少な過ぎて防寒が不十分であれば感冒にもかゝり、感冒が結核を誘發した

り、増悪したりすることもあるが、それよりも大切なことは、皮膚を保護し過ぎ、皮膚の鍛錬が不足して却て感冒に罹り易くなることである。襟巻、手套などの衣服の過剩、又必要以上の厚着等によつて、皮膚を弱くし、又皮膚の外氣日光への接觸を妨げるのは宜くない。出来る限り簡素な衣類をつけ、皮膚を冷氣、冷水等に觸れしめ、外温の變化にもよく耐へ得るやうな皮膚の錬固が望ましい。寒暑を通して薄着の戶外運動は此の目的に叶ふ。

住の注意

住居は衣服の延長の如きもので、人體の保護に家屋は必要であるが、保護に過ぎると却て不健康の原因となる。住の缺陷としては、屋内の空氣が悪くなること、日光が十分に射入しないこと、濕氣が籠り易いことなどが挙げられる。敷地や構造が悪くて濕氣の多い家屋は恰も濡れた衣服を着て居るやうなものである。屋内の空氣は埃、煙、

水蒸気、炭酸ガス、一酸化炭素などで汚され、酸素は缺乏し、更に結核菌の如き病原體を含むだりして、誠に不潔危険に傾き易い。かくの如き空氣は結核を感染せしめるだけでなく、結核を悪化せしめる。又日光の十分射入しない室内には病原菌も長く生きて居り、身體を虚弱にし、且つ室を不潔陰鬱にする。

以上の如き缺陷を去るには、日當り、排水のよい敷地を擇み、窓を大きくし、戸障子を多くし、日光射入、外氣流通を十分にすることがよい。健康な自然は屋外にあるのだから、其の自然の健康作用を屋内に誘導することが肝要なのである。又家の中に自然を入れると同時に、戸外へ出て自然に親しむことも大切な心掛である。

食の注意

結核は動物食に傾く西洋人にも植物食を主とする東洋人にも發生するものであつて、結核豫防に乳肉過重の所謂滋養食のみを必要とするのではない。要するに缺陷の

無い食物は體力を完成するのであるから、之を補正するやうな食べ方をすればよい。大體に於て自然そのものには缺陷が無いのであるから、なるべく自然に近い食物を、なるべく色々取り交へて、適量取るを極意とすれば間違が無い。米で云ふなら精白米よりも成る可く搗精度の軽い方がよく、魚は頭内臓骨までも全體食べられるやうな小魚の方がよりよいのである。雑穀野菜果實の類も出来る限り自然を損ぜず、あらゆる多種を混用するがよい。野菜果實の一部分は生で食へることも必要なものである。

勤の注意

日本人は勤勉な國民であるから概して働き過ぎる傾向がある。時には寢食を忘れて刻苦精勵し、健康を犠牲にしても働き抜かうとする。其の意氣は壯であるが、かくの如きは持久の用には向かない。或る程度までは働くほど強くなる人體ではあるが、其にも限度がある。日本の現状は過勞に傾いて居ると思はれる。過勞は健康を害し、體

力を弱め、従つて結核に對する抵抗力も低くなり、結核の發病増悪を多からしめる。勤勞は固より美德ではあるが、長期建設の時代には之を統制することも必要である。働いて疲れた身體を恢復するのに最も必要なものは睡眠であるから、睡眠時間は十分に取らねばならぬ。殊に結核に最も感受性の高い青年期には睡眠と其他の休養を適當に與へたいのである。

日常生活の衛生的改善は簡單平凡な事であるが、それだけに却て實行し難いものである。然し此の平凡の眞實が實踐されなければ結核豫防の効果を擧げることとは困難である。又各個人の日常生活を結核豫防的に向上せんがためには、工場も役所も學校も其他あらゆる方面で協力してくれねば駄目である。

七 結核患者のある家庭では

健康なる家庭生活は國民誰しも必要とする所であり、かくして體力を培ひ、抵抗力を増し、以て結核豫防の目的を達するのであるが、家庭に結核患者があるやうな特殊の場合には、格別の豫防注意が必要である。

結核患者は結核菌の製産所であつて無限に結核菌を放出するのであるから、家庭に於て結核患者と同室して居るものは最も危険である。常に患者と起居を共にして居る者は最も濃厚な感染を受けることになるのだから、患者と家族とを隔離せねばならぬ。そこで出来ることなら患者を療養所へ送るのが最も宜しい。

然し療養所は結核患者を全部收容するほど十分には無いのだから、家庭療養の満足に出来る場合は勿論家庭で療養してもよい。現在の状況では結核患者の大部分は家庭

で療養をせねばならぬのであるから、其の場合間違のない療養生活の行はれることは、患者のためにも社會のためにも肝要なことである。

先づ病室は出来るならば別棟、少くとも別間でなければならぬ。別棟と云ふと大業だが、屋敷内の空地に、病床を横へ得るだけの小屋を設けても目的は達せられるのである。別間の病室であれば、他の室との空氣の交通を斷ち、病室の窓は十分に開放し、外氣の流通をよくして、病室内に汚れた空氣を滞留させないやうにすれば、治療の上にも、他人に對する感染防止の上にも好都合である。

結核患者は病室の空氣をも汚すばかりでなく、患者身の周りの物品をも病毒で汚すものであるから、痰唾の始末は固より、他人との交際、物品のやり取りなどにも消毒の注意を怠つてはならぬ。

患者は健康人以上に日常生活に留意し體力の増強を圖るべきである。豫防だけで

なく治療の根本も日常生活にあることを忘れてはならぬ。

結核患者を持つ家庭では相談所を極力利用すべきである。患者ばかりでなく、家族の各員も時々健康相談を受け、適切な指導の下に豫防生活を誤まらぬやうにすべきである。

八 結核の多い社會では

日本の如く結核の蔓延してゐる國に於ては、國力を擧げて結核豫防に當らねばならぬ。

結核豫防を盛に行ふには先以て結核豫防精神を國民の間に振興せねばならぬ。結核豫防の重要性に鑑み、萬難を排しても結核豫防に邁進するといふ意氣込が無ければ目的は達せられない。

結核豫防國民精神の發露として實現せられねばならぬものが結核豫防生活の實行である。結核蔓延前の生活を漫然持續するのでは結核は豫防し得ない。

次に結核豫防相談施設はどうあつても擴充して、全國を其の相談所網の下に置かねばならぬ。すべての疾病の豫防、あらゆる健康生活の改善に何れも相談所（保健所）を要するのであるが、結核に至つては相談施設なしには全く出来ない相談なのである。此の相談所がよき人材を備へて完全に働き、民衆は結核に關する正しき知識を獲て十分に相談所を活用するやうになつて始めて結核豫防が緒に著くのである。

更に療養所を一定量まで充實せねばならぬことも論をまたぬ。結核は庶民病とも稱せられ、資力薄弱なる者に多く發生する。結核は貧乏の原因であり、貧乏人の病氣であり、又貧乏人の強敵である。如何に知識を興へ、如何に指導しても、資力なき者に結核の療養は出来ないし、豫防生活も望み得ない。即ち世の中の結核患者の一定數は

公設療養所へ入れる外に手が無いのである。

結核豫防施設は可なりに金を要する。例へば結核療養所を建てるのに一床當り千圓以上かゝり、之を維持するに毎年五百圓以上をかけねばならぬ。假に十萬床を建設するとして一億圓の建設費と五千萬圓の經常費を要するのであるが、結核蔓延の損害に比較すればそんな金は何でもない。但しその何でもない金が貧乏な國民には中々出されないのである。

結核豫防生活を実現するにも餘り貧乏であつては其が出来ない。つまり餘り貧乏であつては結核豫防は至難の業といふことになる。然し我々は結核豫防が出来ないほど貧困ではない筈である。又結核蔓延を袖手傍觀するほど頑愚ではない筈である。

九 財団法人結核豫防會の使命

結核豫防の急に迫らられて居る日本に、有難き御懿旨を奉體して新に生れた結核豫防會は誠に重大なる國家的使命を負ふものと云はねばならぬ。

結核豫防會の第一の仕事は御令旨の御趣旨を國民に徹底し、結核豫防の國民運動を起すことである。

之と伴つて行はるべきことは國民に結核知識を普及し、引いては結核豫防生活の實踐を奨勵指導することである。

啓發指導に際しても、單なる理論よりも實際の施設或は實地の成績を基礎とする方が効果的であるので、結核豫防會に於ては、結核豫防模範地區を設定して、無結核地を實現し、實物指示の資料を提供する計畫である。

療養所や相談所は政府と公共團體の手で擴充されて行くが、其の優秀なる規準を得るために結核豫防會に於て研究調査し、其のモデル的施設を爲すことになつて居る。

結核豫防治療の實際方面にも猶ほ研究を要する部分が少くないので、學者を集めて其の方面の研究をも行ふ。又結核豫防事業の人材をも養成する。

結核對策は國策の一部として大所高所から検討されねばならぬ問題であるから、更に之を調査せんがための委員會も置くことになつて居る。

此の會は朝野の資力と才幹とを集めて國民的機關として我國に於ける結核豫防運動を振興するのであるが、之と呼應して結核豫防法による施設は因より、其他結核と相關聯せる各方面の施設が夫々大に擴充され、遠からず我が國の結核豫防も躍進的向上を見るであらうと期待されて居るのである。

十 結核の無い國を目指して

體力向上の根底は結核豫防である。結核が豫防され撲滅されれば國民體力は必ず大に向上し、國力は必ず大に増強する。

結核を豫防し得ないやうな國民の前途に繁榮はない。

我國の結核豫防も準備時代が満く過ぎんとして居る。あらゆる方面に於て機既に熟し、結核豫防國民運動が新しいスタートをさらうとして居るのである。我々の旗幟は結核豫防から結核撲滅に改めらるべきである。而して結核の無い國の具現を目標として驀進せねばならぬ。

先づ結核を除け、然る後に興國の途が拓かれる、是が結語である。

昭和十四年十月十七日印刷
昭和十四年十月二十日發行

(實費頒價金十錢)

發行者 水原信一
東京市世田ヶ谷區東玉川町二丁目番地ノ四

印刷者 杉田彌太郎
東京市麴町區麴町五ノ二

東京市麴町區大手町厚生省內

發行所 財團法人結核豫防會



終

